特集
海と島の日本・Ⅷ
初めての旅、大きな島、九州へ

戦中、父親の郷里・志摩半島の海で多くの時間をすごした。当時、砂利道をのろろ走るバスはあったが、時間がかかるし排気ガスで車酔いするから、小鳥の点在する英虞湾を巡船に乗るほうが楽だったのでした。そこで陸の孤島同然であった。住まいは伊勢神宮外宮の神苑の隣にあったが、海を避けて毎日、海や近くの海を結構に眺めていた。海を陸と区別して、特別の場所という感じを持っていなかった。

一九五八年、大学は文学部に入ったが、一九五八の春休みに初めての大旅行に出た。郷里・伊勢で子どものころからの友、大文学部哲学科のIと一緒に行われた旅行である。

旅をするようになって、長い間ずにじむ多くの島を訪れたと感慨していたが、数えてみたら八○ほどであった。日本群島にはおよそ八八八○の島があり、うち四二○ほどが有人の島であると聞いていたから、わずか八○しか行っていないと、少々にいっそうかっかりした。「旅する巨人」宮本隆司さんは四二○余の大半を、それも交通不便の時代に訪れたというから、驚嘆するばかりだ。

訪れてみると島はいつも面白く、立ち去り難い思いがあつた。島のものの自然景観の違いはもちろん、歴史や文化を映し出している集落と習俗、産業、漁船の営む港の風景、そしてなによりも住む人々の気質が島それぞれを個性を持つている。そんな島々の個性の集まりである「群島日誌」の面白さがここにある。

そこで、島の記憶をいくつ、とつとみることになった。
天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。

天草の漁港。

天草のキリシタン教会。
去ってしまった。

菅島のテレビ結婚式

一九六六年一月。当時わたしたしは名古屋にあるテレビ局のスポンサー担当の営業マンをやっていた。徳川無声と中村メイコ、この二人が司会と仲人役をする結婚式の生中継。番組の放送で、三重県鳥羽市の離島・菅島へ渡った。

巡航船が着くと島人の群れが押し寄せた。当時はまだテレビ受像機が島に三台しかなく、中継など稀なものの珍しい時代であった。そこへ有名人が来たのかたらいたまらない鳥は大騒ぎとなった。私の記憶に残っているのは、出稼ぎのない鳥なので「わしらが初めてのほうやろ」といった。かあさん（妻）も連れていたって飯場で一緒に立ち上がった。博打はなんでもやった。競艇、競輪、麻雀、パチンコ。

一九六九年に、私はテレビ局を辞めて郷里・伊勢へ帰り、「博物館」と言ったどこて結婚式場は砂浜だったそうだ。

そこで菅島を訪れることがなくなった夏前、女遊び以外は、「という亭主に妻はニヤリと笑った。二〇年ほど前、それこそ仕事も少なくなってきたし。

親父の面倒も見なあカンできないが、一鳥は豊かなな。「とらえ」という。漁業は船や機械に金がかかる。陸（島の外）に持ってくる車にも金がかかる。それでも鳥は暮らしよ。家族もいるし、兄弟もいるので帰って来た。いまは毎日、日がな一日釣りに出る。
みんな顔見知りだ。夕方になると誰かがサカナをおいそぐる。鳥のみんなが親戚みたいである。

孫が来て『爺ちゃんのサカナ食うとポコ元気になるわ』と言ってくれるのが嬉しい。「子どもは島で育てただけ、われは左官屋で、出稼ぎで何日も家を空けた。日頃子どもと顔合わせる。」

今日のご飯作りたない。そんな時、橋があったらえのにと奥さんはいう。なんでもないことだが、娯楽の少ないことが苦しいのだ。陸の人間には分からぬ悩みであっても仕方がない。

いろんな事情が重なって、島に都会からも「嫁さん」が来るようになった。塚玉から来た子は、どこへ出してもぺっぺんや。最初は船酔いでゲロと吐ったのに、いまは元気にして仕事し続ける。

島に新らしい風が吹き出したのだろう。海の環境は悪くない。魚も停滞気味、価格も低迷している。外から来た若い嫁たち、変わり目というよ。

「小木民俗資料館」を訪れて佐渡へ

一九七三年夏、佐渡へはじめて渡った。佐渡は沖縄に次ぐ周囲二六キロの大きな島だった。小木の宿根木にある小木民俗資料館（後に『佐渡小木民俗資料館』と改称）を訪ねる目的であった。

二年前の一九七一年一二月、大阪万博の翌年、鳥羽で野焼き場へ運ぶ棺桶を乗せ、4人で担ぐ。「ミコシ」。昭和30年代まで使われていた（佐渡島小木民俗博物館、本誌編集部撮影）。
本さんに教えられた。博物館の原点である資料を忘れていったのだった。
小木ではその資料の量に圧倒された。廃校の校舎いっぱいにところ狭しと民具資料が詰まっていた。たらい船、礫の魚介藻を獲る漁撈用具はもちろん、漁村の暮らしの道具や炊具、棺桶のような葬具までであった。国の重要有形民俗文化財に指定されているのは漁撈用具など海の資料であったが、ほんの観光地的な案内図集も取集されていった。その内容の豊富さ、島民たちは海ばかりでなく、取巻き自然のすべてをかかって暮らしてきたことを示していた。

漏らさず集めて資料館をつくった人々の執念を感じた。
佐渡という島の文化に魅せられた外の研究者に刺激されたのは、その資料群は、島の豊かさを秘めていた。豊かさというと、その土地の人々がモノの集め人であった。そこらじゅうで使うことができ、島は恩恵を受けなかっただけでなく、それはいながら多種多様な器具、道具を工夫した島人たちは日々の暮らしを豊かにしていた。モノを大切に作り使う、暮らしを一番に考える気持ちが伝わってくる。

小木で博物館のモノ集め、集積したモノから伝わる感動が、ある夏の日にこの島へ渡った。肥った野良犬が一匹いた。坑口など危険な場所は完全に閉鎖されているので、炭鉱の残姿はよく読みとれない。その上に乗る八九階建のアパート群は、暗くしめっぽく、暗い底に僅かな光しか當たらない。

「乗りたい島」軍艦島へ

O.S.運動（= 催し海の博物館）に書いた文章から引用する。
一杯飲み屋の看板は奈落の入り口に並んで、傾いていた。遊郭は分、陽のところぬ地階にあったのだろう。小さな口の字型。コの字型をした高層アパートの南向きの海の見える家たちは、島ヘ来ることもなく都会の豪邸におさまっていたのではあるだろう。神社の前は広庭になっていて、亭主の安が多収入を願う女たちで引きも切らなかった様子がしのぼれる。周囲にぐるりと回されたコンクリートの厚い護岸壁は高い低いはあるが、島内側で三メートル、海面からは一メートル。二メートルはある。海は海でも、浜へ降りられる場所はなない。海水浴など思いも及ばぬ海であって、コースの唯一の入り口出口。軍艦の中は牢獄であったのだろうか。盛時、六・三ヘクターに五○○○余人が住んでいた。それは東京の人口密度の一〇〇倍。さらに、採炭、貯炭、選炭などに大きな場所を取り、人間の住居は狭く高せざるを得ない。その
高層建築の廃墟が立ち並ぶ軍艦島の全景・1983年撮影。

ため、すでに大正五年から、鉄筋コンクリートの高層ビルが建てられたという。廃島では、そんなアパート群は二二棟、八九五世帯分を数えた。

電気と熱源を除くなにもかもが船で島外から持ち込まれて

石炭以外の生産品は皆無。水、食糧、衣服、住居用資材。

それ以前は一人一日五〇〇リットル以下の水で、汗まみれ泥まみれの労働者は暮らしていたと記録にある。風呂など着

くに入れない量にすぎない。

朝も三時から弁当箱下げて、坑内降りるのも、親の罰

どんどん

昭和二年の賃金は日給が坑内五〇銭、坑外四〇銭、帝大出の月給三〇〇銭。工事出が三〇〇銭の頃である。自分（ Victims）の小さい頃の大正時代は納屋制度が残っており、給料は土曜日ごとに親方からもらい、親方は酒三合とおかずを作っ

て、その分は給料から引かれたという。遊郭（島には七軒喫

業女性は三〇人位いた）へ行くにも親方の印判をもらわな

と行けなかった。正月には親方は絞付きを作らせて金を

取り、鉱夫は苦しくて逃げようにも、借金で逃げられないか

った。《長崎・年輪》と、大正二年生まれの笛中久光老が語

っている。

納屋制度というのは、人夫の募集と監督を特定の

請負
人を定めて任せる下請け制である。

一週間に一度の開放された休憩の目的に、一升徳利を摘え、飯茶碗になみなみに冷酒を注ぎぬ訳無きを看に、酔いを払
さる者や緋のはみ出した煎餅蒲団を畳み、それを囲んで
花札をくり博打を打って楽しむ姿を目撃したが、又酔眼も
うろうとした人相の悪い男がその仲間の一人と口論の末
に持って半狂乱のように相手をむけ、斧や鍬などを振り回し、
或は出刃、あいくちなさをさが手
本刀をふりかぶり互いに斬り結び遂には頭を割られ、肩先
を斬られ、血連絡となって医師のもとへ担ぎ込まれる
（高島町文化史）とあるが、たぶんその数は事実とは違 имеて
なり、コンクリートの牢獄の中で金と力で生きる権利さえ
買い取られて狂い死んだものは地獄であった。

敗戦後の軍艦島にも「民主主義」が少しずつ入ってき
て、獄の姿を消した。学校も出来、水も来て、文化も相
応に落ちてきた。翌日、今も細々と炭を焼ける高島
端島の北にある
離れ島　役場を訪ねた帰り、真夏の太陽がギラギラ照り
つける高層コンクリート・アパート群の間を歩いていると
突然「ウォー」と歎の叫びが聞こえた。もう一度「ウォー」

本稿で取り上げた島々
大崎上島 素晴らしき船こぎ競漕

昭和四九年一月二十五日、名残り惜し軍艦島、三菱端島、破・操業八四年、ついに閉山式。長崎新聞は当日の様子を伝えている。

一方の軍艦島では、三菱石炭鉱業高島鉱業所端島鉱が一日の閉山式でついにヤマの灯を消した。石油危機にかかわり、石炭見通しの利用がクローズアップされていったので、同月限りで八四年の歴史に寂しく幕を下ろした。一島は「天寿を全う」して棄てられるが、ヤマの男たちは島の天寿を祝って棄てられていった。

その後一〇年、軍艦島を去った人々は何処で幸せに暮しているのだろうか。消息を知るすべはない。

石原義剛

1937年三重県津市生まれ。1960年早稲田大学文学部卒。1971年鳥羽市に「海の博物館」を開館。現在に至る。専攻は近代漁業史、漁村民俗、博物館学。著作に『伊勢湾－海の祭り港の文化－』『熊野灘を歩く－海の熊野古道－』（風媒社）
船こぎ祭りは「住吉祭」が正式な名前である。朝八時、海に面した住吉神社の前に全員が参列して祭礼が始まる。神社の前の海から競漕ははじまる。その年の出漕艇は島の西側六地区に限って六隻だった。六地区の前の海域で競漕が行われ、勝った回数で総合優勝が決まる。漕ぎ手は一人一人、大権みを加えて一人。地区の名誉を勝敗を大きく左右する。潮の流れ、強さ、風の向き、他艇の位置などを読み取りながら、コース取りを巧みに変える。しかし、い女の子が集まるところで船は早くなる。一競漕終わると岸や応援船から祝儀袋の「花巻」が漕ぎ手に配られる。fdbf

夕方までつづく権伝馬競漕（大崎上島）。

権伝馬の行われる「住吉祭」のはじまり（大崎上島）。

特集 海と島の日本・Ⅷ

しま220 2010.1

41
この日、最終レースは西日の傾き赤く染まりだすころ、
沖の岩礁を回る競漕を終え、鳥のもう一つの神社、厳島神
社の岸へ戻って行ったその夜はいつまたに若者たちの歌
声が消えることはなかった。

この後、海の博物館は、鳥から船こぎ競漕の船をはじめ
四隻の木造船の寄贈を受けた。なかに長さメートル幅
の子どもたちが遊びに使う薄板張りの箱船だ。よく海に
浮くものだと思。子どもたちは小さい時からこんな小船
で海に駆け立てるのだ。

大工の坪山さんが紹介されて話を聞いた。次日は早朝から
レンタカーで鳥を隈なく回れた。海岸
線のどこを走っても人はほとんど見えない。古い木造の
民家が多い。田中一村描く、シダやソテツの風景がどこに
もあって、草木と虫の音ばかりがあった。

八月踊りの奄美大島へ

二〇〇二年、奄美大島へ渡ったのは、鳥のあちこちで催
次々と鳥唄が吹き立っていた。唄っていたのは昨日会った
名人だという。

次の日の朝、名瀬港の奥の岸壁をコの字型に陣取ってテ
海岸にあった小舟「アイノコ」
（奄美大島）。

42
名瀬の船こぎ競漕（奄美大島）。

八丈島に遊ぶ

二〇〇八年。東京から南へ二八七キロ。海の上を三〇分
も飛んだ飛行機は瞬く間に八丈島空港に降りた。可
愛い空
この旅は久しぶりに目的のない遊びの旅だったから気が軽い。

港だ。この旅は久しぶりに目的のない遊びの旅だったから

石垣のある道（八丈島）。

八丈島の食文化は特異だ。だいたい今日見られるような形は明治期以前だろうが、島外からの「移入と改良」により

八丈島の食文化なのだ。「島寿司」は東京でいう「ズケ」。島の辛子

石垣のある道（八丈島）。
まだ続く島々の旅

日本列島はまさに群島である。島には大小があるし、島の位置も異なる。平地の有る無しもずいぶん違いがある。